

東海の古代

第257号 2022年1月

会長 : 畑田寿一
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp メルアド変更
 HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

2022年の年頭にあたって

会長 畑田寿一

明けましておめでとうございます。

「古田史学の会・東海」を「東海古代研究会」に改称して初めての正月を迎えます。会員の皆様には新しい年を健やかにお迎えされたこととお慶び申し上げます。

近年、歴史学会も少しずつ変化が表れました。3世紀の卑弥呼以来、ヤマトが日本を統治し、その象徴として前方後円墳があるとする考え方から、「5世紀頃には近畿に複数の勢力が存在し、有力者達による連合統治が行われていた。地方に於いても同様な状況が見受けられる。」とする意見が台頭し、稲作についても九州の稲作開始から尾張の稲作開始時期までの700年を移行期間と呼ぶことを民博の皆さんが提唱しています。稲作文化が急速に浸透して国家統一が進んだのでは無く、その地域に合った文化・政治体制が長期間存在したことを示しています。

古田武彦先生が提唱された多元的史観に基づく九州王権の存在が改めて見直される時代が来たように思います。我が会は「他の意見を尊重しつつ、開かれた対話の促進」をモットーとしています。本年も皆様の活発な論議を期待しています。

蘇我氏の歴史（乙巳の変まで）

一宮市 畑田 寿一

蘇我氏は6世紀から7世紀前半には天皇を凌ぐほど勢力を誇っていた。しかし、その出自については謎が多い。前回の紀氏に続き蘇我氏を取り上げてみたい。

1 系図からみる蘇我氏の祖先

一般には次の系図を基に論議がされている。

- 尊卑分脈
蘇我満智 — 韓子 — 高麗 — 稲目 — 馬子 — 蝦夷 — 入鹿
- 紀氏家牒
石河宿禰 — 満智宿禰 — 韓子宿禰 — 馬背宿禰（高麗）
- 古事記（孝元天皇の段）
孝元 ----- 建内宿禰 — 蘇賀石河宿禰 （蘇我石河宿禰）
葛城長江曾都毘古（葛城襲津彦）
木角宿禰 （紀角宿禰） 他男4名

上記の系図に拠れば、4世紀末頃の建内宿禰の子は7人おり、蘇我氏は葛城氏や紀氏と兄弟であった。蘇我稲目は5世紀初めの人物であり、年代的にも合うが、「満智」は朝鮮半島の人物らしく、その子の「韓子」は朝鮮半島出身の母を持つ人物、「高麗」は高句麗に関係がありそうな名前である。「稲目」は実名らしいが、その後、「馬」と「鹿」が続き、途中で東北の夷を連想させる「蝦夷」が入るなど、本人が名乗っていたと思えない名前が続く。主権を争っていた藤原氏が蘇我氏を貶めるために史誌を改竄したのでは無いか。

更に建内宿禰は孝元天皇の孫としているが、建内宿禰は400年以上生き、祖とする氏族は多数に及ぶが実在性に乏しい。また、蘇我満智については『日本書紀』の履中2年の項に物部氏や平群氏と共に国政に参加したとする記述があるが、史実としない研究者が多い。

2 蘇我氏が渡来人である可能性

蘇我氏の出自については次の4説がある。

- ① 大和国高市地方（現在の橿原市）
- ② 大和国葛城地方（現在の御所市、葛城市）
- ③ 河内国石川地方（現在の富田林市）
- ④ 百済、加羅からの渡来人

その内、③と④は現在では否定説が有力であり、①と②については宗我坐宗我都比古神社の存在や、蘇我蝦夷がこの地に祖廟を建てたことから有力視されている。5世紀後半には葛城氏が没落したが、残余勢力が再編されて蘇我氏となったと考えるのが妥当であろう。

3 蘇我氏の勢力の根源と政治の専横

紀氏の勢力の根源は海洋交易であることを筆者は「東海の古代255号」（2021年11月）で論考した。これに対して蘇我氏は前述の飛鳥の地の開発の他に、全国の「私有地の開拓」と「屯倉の管理」では無いかと考えている。以下にその状況と政治の専横度合いを述べてみたい。

（1）蘇我部の分布

支配地を示す資料は無いが、関係する部民が存在していた地域は次のとおり。

特徴としては

- ① ほぼ全国に散らばっている。
- ② 東国（信濃、関東、陸奥）まで勢力を伸ばしている。
- ③ 瀬戸内海は中国側、四国側ともに抑えている。

地域	国（郡）
畿内	大和、山城、河内
東海道	遠江（浜名、新居）、相模、上総、下総（千葉）
東山道	美濃（加毛、方県）、信濃（筑摩）、陸奥
北陸道	越前（足羽、坂井、江沼）
山陰道	丹波（天田、多紀、桑田）、但馬（出石）
山陽道	播磨、備前、周防（玖河）
南海道	阿波（板野）、讃岐（鶉足、大内、山田）、土佐（長岡）
西海道	筑前（嶋郡、早良）、肥後（玉名）

（出典：北海道大学文学部紀要1964年、阿部武彦氏）

（2）6世紀中頃のヤマトの政治体制

宣化元年（536）、ヤマト朝廷は九州地方の飢饉を救うため米を九州に移送した。

この時の役割は次のようであったと記述されている。

主管者	運搬担当者	支出する屯倉
宣化天皇	阿蘇君	河内国茨田の屯倉
蘇我大臣稻目	尾張連	尾張国の屯倉
物部大臣麁鹿火	新家連	河内国新家の屯倉
阿部臣	伊賀臣	伊賀国の屯倉

本来ならば宣化天皇が詔を出して、管理している国造が指示に従えばよいはずであるが、手分けをして指示を出している。特に尾張を納得させるには蘇我稲目の登場が必要であった。この時代、中央の統制力に限界があったことを示している。

しかし、6世紀後半の欽明天皇の時代になると様子が一変する。例えば蘇我稲目や馬子は白猪屯倉を整備するとともに、田部などの部民を編成して公租公課を取り立てた。これはヤマト政権の財政基盤の整備に役立ったが、蘇我氏の勢力拡大にも繋がった。

(3) 舒明天皇即位時の後継者争い

7世紀前半、推古天皇崩御後の後継者争いの状況は舒明天皇即位前の『日本書紀』に詳しく記述されている。当時の実力者達が2派に分かれて、蘇我蝦夷ですら1本化が難しかった。しかし、大勢は田村皇子に傾き、最後まで抵抗していた境部臣摩理勢が排除されて決着がついた。

ここで注目すべきは

- ① 後継の天皇を選ぶルールが明確でなく、中央の勢力の力関係で決められていた。
- ② 最高実力者の蘇我蝦夷ですら、これに従わざるを得なかった。

の点にある。天皇を凌ぐ勢力を誇ったとされているが、日本書紀の記述は中央豪族に拠る連合政治の真実を述べていると思われる。蝦夷の時代は諸氏に対する配慮がなされていたが、馬子の時代には専横が進み、身を滅ぼした。

4 乙巳の変

645年、中臣鎌足と中大兄皇子が宮中で入鹿を討伐するクーデターが発生した。

翌年、私有地や部民の所有を禁止する大化の改新の詔がだされる。この改革の実効は50年後を待たねばならないが、一部区域では評制が敷かれ、私有地や屯倉の国有化が進んだ。これは土地所有を勢力の基盤とする蘇我氏の勢力を削ぐための策とも言える。ここで蘇我氏宗家は滅びるが、傍流は依然勢力を保持し続け、以降、天皇家、蘇我氏、藤原氏が三つ巴になり、政治の混乱が続くことになる。

5 まとめ

以上、各方面から論考を進めてきたが、次の事が言えるのでは無いか。

- ① 蘇我氏の出自を朝鮮半島や建内宿禰の求めるには証拠が不十分である。葛城氏と同様に大和にいた諸氏の内、時流に乗った蘇我氏が加羅出身の渡来人と結びつき、全国的に勢力を伸ばす結果となったと考えるのが妥当であろう。
蘇我氏の始まりは恐らく4世紀後半まで遡ると思われるが、頭角を現したのは5世紀中頃であろう。
- ② 先般論考を試みた紀氏は、水軍が主体の勢力であったが、蘇我氏は土地の開拓、天皇の所有地の管理を中心に渡来人を使って勢力を伸ばした。特に、東国への勢力の拡大が顕著である。一方、北九州中央部、出雲、近江、尾張には蘇我氏の足跡が無い。こ

これらの地は独自性を保っていた。

- ③ 更に、天皇家に妃を送り込むことにより、地位を万全なものにしようとした。このため政敵を討つ事態が頻発し、聖徳太子の子の大背大兄王を討つに至り、クーデターにより自分が討たれる結果を招いた。
- ④ しかし、飛鳥の地を開拓し、仏教の普及を助け、日本の近代化に貢献したことは認めてもよい。

大海人皇子の生年と出自

名古屋市 石田 泉城

1 はじめに

当会の会員である酒井誠さんは、前回の例会で「天智天皇から天武天皇までの間の疑問」と題して、天智天皇と天武天皇の人物像に関して疑問に思っていることを列挙されています。とりわけ、「天智天皇と天武天皇はどちらが年長であるのか」「天武天皇は誰の子であるのか」「天智天皇の娘はなぜ天武天皇に多数嫁いでいるのか」は、多くの古代史ファンを惹きつける疑問です。

そうした中で、酒井さんから小林^{やすこ}恵子の『白村江の戦いと壬申の乱』（現代思想新社、1987年）をお借りしましたので、この本の内容を批判しながら、天武天皇に関する疑念について、あらためて見つめ直します。

2 小林^{やすこ}恵子のスタンス

小林^{やすこ}恵子は、1936年生まれの古代史研究家で、小説家といてもいいかもしれません。著書としては、『聖徳太子の正体—英雄は海を渡ってやってきた』『聖徳太子は西突厥の王（^{カガシ}可汗）だった』『古代倭王の正体 海を越えてきた霸王たちの興亡』『興亡古代史—東アジアの覇権争奪1000年』『白村江の戦いと壬申の乱』『本当は怖い万葉集』など、そのタイトルからして古代史に関わる興味深い話題を提供しています。

小林は、記紀の記述の解釈が偏重している日本史学会と一線を画し、国際的視野に立って従来の定説を覆した仮説を提示するとされています。日本史学会の偏重ぶりは私にも理解出来るところですが、ただ、戦後の日本史学会は記紀を軽視しているのが実態ですから、その点では小林も同じ穴の貉であると思います。

また、小林は、日本の唯一の正史『日本書紀』の記述を鼻から否定的に見ますが、勝者の歴史書が勝者側の立場で書かれているのは当然のことで、それを承知していれば、歴史は勝者のものであり、それから全くかけ離れて歴史は語れないでしょう。

正史とは違う歴史を語るのであれば、神社などに伝わる伝説や伝承を参考にすべきであろうと思います。敗者となった在地の支配者は神や王や鬼として語り継がれています。

小林の著書『白村江の戦いと壬申の乱』は、物語としては面白いし示唆にも富んでいますが、根拠となる資料について自らの思考と合致する切り取りを行い、それをもとに推理していますので手法に問題があります。

3 大海人皇子の生年

『日本書紀』（以下、書紀）は、30巻あるうちの第二八、第二九の2巻が天武天皇に費やされています。書紀に占める天武天皇のウエイトは大きく、このことから書紀は天武天皇（以下天武）のために記されている要素が高いといえます。

とすると、天皇の生年が記されないのは珍しくないとはいいいながら、天武の生年が記さ

れないのは奇妙です。

天淳中淳中此云農難原瀛真人天皇、天命開別天皇同母弟也。幼曰大海人皇子。生而有岐嶷之姿、及壯雄拔神武、能天文遁甲。

天淳中原瀛真人天皇は、天命開別天皇の同母弟なり。幼きときには大海人皇子と曰う。生まれまたときより岐嶷（秀でている）の姿有り。壯に及びて雄拔しく神武し。天文・遁甲（戦いを有利にするために自然現象を用いた兵法）に能し。

天武は天智天皇（以下、天智）と同母の弟で、幼い頃は大海人皇子（以下、大海人）といい、幼少から秀でていて、壮年になると雄々しくなり、神武のように人間離れし強く勇ましいとあります。つまり、幼少期のことは、諱と賢いことだけが記されるのみで、他は不明です。

記紀には天武の生年に関する記述が無いので、後年の書物である『一代要記』・『本朝皇胤紹運録』・『皇年代略記』などから生年は推古三十一年（623年）ではないかと推測されています。

ところが、大海人の同母であるはずの中大兄皇子（以下、中大兄）の生年も明示されておらず、その年齢は、641年10月舒明天皇の薨去後の殯において、中大兄が16歳で誄をよんだとあることから、逆算して生年を626年とされるのが大方の考えです。中大兄は626年生れでよしとすれば、大海人が623年生まれと推測すると、天武は天智の弟ではなく年長ではないかとの疑惑が生じます。

小林は、結論として、両天皇の生年について、天智の生年が推古三十四年（626年）で、天武は推古三十一年（623年）生まれとして、天武は天智より三歳年上と推定されています。

ただ、このような推定では書紀にある天智との兄弟関係の記事と辻褃が合わないため、通説は、天武の崩御年を56歳として舒明三年（631年）とみなしています。ちなみに、当会の畑田寿一氏は、「東海の古代」245号において、635年生れと推測されており、天武の生まれは、630年前半が妥当なところと考えられます。

小林説の問題点は、やはり書紀の「天命開別天皇同母弟也」の記述を顧みず、後代史料を信用し、それに基づいていることです。『一代要記』は、鎌倉時代の著者不詳の書であり、『本朝皇胤紹運録』は、皇室系図としては最も権威があるものの、室町時代に編纂されたものです。これらの記録と書紀の記事のどちらを信用するかを選択になると思われます。ただ、兄弟の上下関係を覆すだけの決定的証拠は後代史料にはないように思います。

小林は天武が年長と結論づけていますが、書紀といえども後年に修正可能であり、万一、兄の天智、弟の天武という兄弟の関係に基本的な誤りがあるとしたら、『一代要記』や『本朝皇胤紹運録』が出現する鎌倉時代以前に書紀の記事が修正されていたはずと考えます。

3 大海人の諱

天武の諱である大海人という名については、皇子の乳母の名との関連が推測されています。朱鳥元年に天武が崩御したあとの殯において、まず最初に大海宿禰荒蒲が誄しており、その中で「壬生（養育）について言及しています。したがって、大海人は、大海宿禰荒蒲と養育に関して強い結びつきがあると考えられます。

是日、肇進奠即誄之。第一大海宿禰葛蒲、誄壬生事。

この日に初めて奠（供えもの）をたてまつり、誄（死者への言葉）す。第一に大海宿禰荒蒲は壬生（養育）のことを誄る。

大海宿禰荒蒲の「大海」<タカイ>という文字は、『続日本紀』では「おほしあま」などと呼び習わす「凡海」<ボノカイ>の文字をあてて凡海宿禰龜鎌と書かれています。また、

天武紀十三年の宿彌を与える記事「五十氏賜姓曰宿彌」のなかに「凡海連」があります。つまり、大海<タカイ>であろうと凡海<ボンカイ>であろうと、文字が異なるだけで同じ名を指します。こうした異なる文字を人名にあてることは書紀で多々見られることです。

大海（凡海）氏は阿曇氏と祖先を同じくする同族で海部の管掌者ですので、いずれにしても、大海人の名は海人族にちなんでいるのでしょう。

『古事記』には「阿曇連はその綿津見神の子、宇都志日金柝命の子孫なり」と記されており、阿曇氏は、綿津見神の子孫として海人族を束ね、海の交易を統括する氏と考えられます。阿曇氏は、「安」の文字を用いて安曇氏とも書き、その出身・本拠地は、筑前国糟屋郡安曇郷です。福岡県東区志賀島にある志賀海神社の縁起には、筑前国風土記に神功皇后が三韓征伐の際に志賀島に立ち寄り、阿曇氏の祖神である阿曇磯良が舵取りを務めたと伝えています。また、福岡県北九州市門司区に和布刈神社の縁起にも神功皇后の三韓出兵の際に海路の安全を願って阿曇磯良に協力を求めたとあります。

阿曇氏に関わる地名としては、長野の安曇野が有名ですが、愛知にも渥美があり、静岡の熱海や山形の飽海郡も関連地名のようであり、現存する地名に従えば、本拠地の筑前国から中国地方を始め、近畿、東海、北陸、関東、東北まで進出しているようです。

応神三年の海人反乱を鎮圧した阿曇連の先祖である大浜宿彌の功績によって、阿曇氏は海を統率する地位を確立し、その後天智二年の白村江の戦いの時にも船団を率いた安曇比羅夫が登場していますので阿曇（安曇）氏は海人族を束ねていたことでしょう。

また、天武の嬪である尼子娘は、宗像の地を支配した海洋豪族と言われる胸形君徳善の子であり、これも海人族を束ねる上で有効であるはずです。このように各地に勢力が広がっている海人族の後ろ盾があるからこそ結束でき、その結果、大海人は壬申の乱に勝利したと言えるのではないのでしょうか。

4 大海人の出自

小林は、天武の方が天智より年上であると結論づけた上で、中大兄と大海人が兄弟であることに疑念を持ち、さらに高句麗・新羅や唐人の大海人への協力ぶりや大海人に国際的な行動力があるところなどから、その出自についても疑義があるとして、外国生まれの外国育ちとされます。

また、小林は天武が正当な天皇家ではない具体的な根拠として、天皇家の菩提寺である泉涌寺せんいゆうじにおいて天武を始め天武系の7人（天武・持統・文武・元正・聖武・孝謙称徳・淳仁）の天皇の位牌が除外され「奉幣の儀」も行われていないとします。位牌の除外は天武が天智の系列とは異なる証拠として決定的であると思われ、この決定的な証拠とともに天武が正式な先祖とはいえないと主張されます。

ところが、実は小林が主張されるように天武系だけの位牌が抜けているのではないようです。『泉涌寺史 本文編』（赤松俊秀監修、法蔵館、1984年）によれば、第38代天智天皇から第100代後小松天皇までの63代の天皇のうち天武系の7人だけの位牌以外にも25人も抜けています。つまり、抜けているのは合わせて32人であり、それは次のとおりです。

天武・持統・文武・元正・聖武・孝謙(称徳)・淳仁、平城・仁明・清和・陽成・村上・冷泉・花山・三条・円融・一条・後一条・後朱雀・後三条・堀河・崇徳・近衛・二条・六条・高倉・安德・順徳・仲恭・後堀河・長慶・後亀山せんいゆうじ

また、明治九年（1876年）に、宮内省は泉涌寺に対して京都府下の各寺院に奉安されている位牌等を合併するように通達しており、それは天智始め26人です。

したがって、小林の主張されていることは事実誤認であり、天武系だけが抜けているわけではなく天武系ではない位牌も奉納されていないばかりか、天武系の元明天皇の位牌は合併されており、これらの事実は明らかに小林の示す根拠と違っています。

要するに、泉涌寺の位牌の件をもって、大海人が天皇の祖先ではないという小林の主張は間違っており、大海人は外国育ちの外国人との主張の根幹が否定されることとなります。なお、天武の皇后や妃に関する疑義に関しては、次号以降に述べる予定です。

『万葉集』編纂の意義を問う

刈谷市 酒井 誠

『万葉集』は誰が中心となって編纂に従事したのか、そうして編纂された歌を集めて編集することに何の意義を認めるのか。はなはだ難しい問題である。

いろいろな学者の研究の成果として、幾人かの撰者の名前が挙がっている。大伴家持、大伴坂上郎女、柿本人麻呂、藤原仲麻呂らの名前が挙がるが、明らかに編集される年数が長期にわたるもので、一人の撰とは考えられない。

もちろんよく似た内容の歌を集めて編集しなおしたところもあり、明らかに巻ごとに類似した歌が載せられている。しかし、編纂をスタートさせた当初には編纂目的・意義は持っていたのであろうが、『万葉集』全20巻を全体として捉えた時に、その編纂の意義を理解することは極めて困難である。

この作品は、大きく分けて長歌や旋頭歌もあるが、中心となっているのは和歌（短歌）である。一つ一つの歌を文学作品として鑑賞して、意義を読み取ることは可能なことであるが、ではなぜこの場合は、この歌でなければいけないのかと言われると答えようがない。そうしてみると、歌の内容もさることながら、ここには歴史的な意義、宗教的な意義を感じてしまう。

一応、完成に近い状態になり、20巻の作品が出来上がったのであるが、このような作品が選ばれて定着するまでに、いろいろな歌が選ばれたり消えたりして現在に至っている。『万葉集』の各写本を見ると、載っている歌のないものや、あるものとの違いもみられる。つまり最初から構成を意図されて成立した歌集ではない。そう考えないと巻ごとのつながりも不明瞭で十分に説明できない。

また、この複雑怪奇な『万葉集』の作品の中に実在しなかった人物の歌が紛れ込まされているのではないかと疑問を抱くものである。その実在しなかった人物をさも生きていたかのように装うことこそが、『万葉集』の隠された目的ではないかと思うのである。

私は、かつてより天智天皇の存在に疑念を抱く者である。近江朝廷を考古学的な分析で見た時に、あれだけの近江の地に、日本を統治する都を建設できたのか信頼できない。壬申の乱にしても不破の関の規模の大きさを考察した時に、版築土塁の稚拙な工事の断面を見ると、日本最大の内乱という大きさが伝わってこない。また、天智天皇陵がどうして京都の山科にあって、天智天皇の崩御される時に「馬に乗って狩りに出かけたが、行方不明となって、靴だけが脱ぎ棄てられたところに墓を作った」と『扶桑略記』に書かれてしまったのか、どうしてそのようなことが書かれなくてはならなかったのか。

できることなら日本中の陵墓も発掘してほしい。

※扶桑略記：平安時代1094年頃完成。作者は僧皇円。

1 万葉集の歌の疑問

『万葉集』の中身を見てゆくと、孝徳天皇の皇子である有間皇子の辞世の歌が載せられている。不思議なことに父親である孝徳天皇の歌は一首も載せられていない。天智天皇も天武天皇も持統天皇も実に多くの能力のある家臣を殺したことになっている。

磐代の浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見ん (2-141)

(現代語訳) 磐代(今の和歌山県みなべ町)で浜にある松の枝を結び、命の無事を祈りました。もし私が生きのこることができたら、またこの枝を見たいものだ。

次に有名な、天武天皇と額田王の間で交わされてやり取りの歌の件ですが、私は、これは宴会の余興で語られた戯言であると聞いている。

額田王の蒲生野に遊獵するときに、額田王の作る歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る (1-20)

皇太子の答ふる御歌

紫草の にほえる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに 我れ恋ひめや (1-21)

上記の歌は、朝廷側としたら、外部に出したくない伏せておきたい歌であるはずであるし、有間皇子の辞世の歌など今の世の中であれば、そんなに簡単に外部に漏れるようなものではない。

2 万葉集には、都の生活の様子を歌った歌がない

この点では、津田左右吉博士も述べておられるが、近江朝廷の壬申の乱が終わってずいぶん経ってから、過去の都をしのいで作った歌がある。有名な歌に柿本人麻呂の歌がある。

近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ (3-266)

また、藤原京を歌った歌もある。作者は天智天皇である。

香久山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらそひき 神代より かくにあるらし

古昔も 然にあれこそ うつせみも 嬬を あらそうらしき (1-13)

持統天皇の歌には、

春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣干したり 天のかぐ山 (1-28)

このように、近江の都や藤原の都を歌った歌はあるけれども、都の内部が生き生きと活動している歌はどうしてないのか？

その原因は、近江京の存在がなく、天智天皇もいなかったと考えれば説明が付きやすい。大友皇子の子孫の淡海三船が要職について、天皇名を決めるようなことができたことも、大友皇子の子供の葛城王が天武天皇の宴席に出席できるのもうなずける。

まだおかしいことはたくさんある。斉明(皇極)天皇は天皇の候補がいるのにもかかわらず、どうして二度も天皇になりえたのか。女性が天皇になることすらできない時代に、出自がどこかもはっきりとしない斉明天皇が日本で初めて重祚したのである。重祚したのは斉明天皇と孝謙(称徳)天皇だけである。斉明天皇が重祚できるためには、斉明天皇が舒明天皇と孝徳天皇のそれぞれと兄弟であるときだけ可能性が生まれる。そうでない限り、天智天皇がついでも、有馬皇子が引き継いでも問題ない。全く世界が見えてこないのがこの時代である。

前回の例会の話題

- ・天智天皇から天武天皇までの間の疑問
刈谷市 酒井 誠
- ・額田王と天武天皇 一宮市 畑田寿一
- ・天武天皇と「八色の姓」名古屋市 石田泉城
- ・『宋書』倭国伝の司馬曹達について
東海市 大島秀雄

例会の予定

■ 例会の予定 次回は土曜日に開催です！

- 1 日時 1月15日(土) 13時半～(第2集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会 2/19(土)、3/20(日)

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当：石田)
toukaikodai@yahoo.co.jp **メルアド変更**
- 投稿締切り日 1月28日(金)
- 投稿文のテーマ
天智天皇、天武天皇に関連したこと